

こんな話がある。

昔、フランスのある貧しい村で起こった不思議な出来事についての物語である。

その村の教会に長く勤めた神父が、遠くの村の教会に赴任することになった。

その神父への長年のお礼として、貧しい村人全員が、貴重なワインを一杯ずつ持ち寄り、樽に詰めて、神父へプレゼントすることになった。

そこで、出発の前日、集会所に次々と村人がやってきて、置いてある樽に、一杯のワインを注いで帰って行った。

そして、満杯になった樽を、村長が神父に贈呈したのである。

ところが、赴任地の村に到着した神父が、その樽を開けて、ワインを飲もうとしたところ、不思議なことが起こっていた。

そのワイン樽の中身が、水になっていたのである。

なぜ、このような不思議なことが起こったのであろうか。

実は、貧しい村人の全員が、貴重な一杯のワインの代わりに、そっと一杯の水を樽に注いでいたのである。

そして、全員、自分一人ぐらい正直にワインを注がなくても大丈夫だろう、と思っていたのである。

この話は、フランスの片田舎の小さな村での出来事だが、現代社会において、我々が日常的に目撃する出来事でもある。「全員責任」を標榜する人間集団から、なぜか、「集団的無責任」が創発してくる。我々は、しばしば、そうした出来事を目にする。

今の状況が、全員責任を求められるものだとは言わないが、近いものはある。もし、今の時期に、集団的無責任が出てくればどうなってしまうだろうか。神がいるとするならば、神は我々人間を試しているのだろうか。

福島県は国の緊急事態宣言が解除され、県の緊急事態措置も解除となった。だが、多くの方が心配しているように、ここからが正念場である。ここからが、今まで以上にさらに重要な期間となる。本校では、このタイミングで分散登校による授業（教育活動）を始める。一つの教室に入る生徒の数は多くても10人である。これならば、生徒と生徒との距離を2メートル確保することができる。換気は窓を開けて常時行う。生徒が使う机と椅子は毎日消毒する。マスクの着用と手洗いの励行はもちろんである。1回の登校につき、学校にいる時間は3時間半程度となる。

このような対策を講じたとしても安全が保障できるわけではないし、安心はできない。生徒一人一人の意識の高さが必要となる。学校に来る以外の不要不急の外出をしない。常に3密を避けることなどは今後も継続すべきことである。

一時はコロナ騒ぎなどの言葉が聞かれたが、もはや騒ぎのレベルではない。今ではウイルスとの共存となってきている。新たな生活様式とともに長期戦となる。学校にとっても長丁場の取り組みとなるが、生徒の心身のケアをしながら、様々な方策を用いることで学習を保障していかなければならない。長期戦ではあるが総力戦でもある。誰一人として無責任にはなれない。